人権コラム７月号

「命に届く授業」

大阪教育大学　岡田耕治

大阪府内のある中学校で、家庭科の授業が始まりました。先生は家族に食事制限をしなければならない人がいて、大変な思いをしたので管理栄養士を目指して大学に進んだこと。資格を取るために病院に実習に行った時、多くの患者さんから「こんな風に食事制限や入院をする前にもっと食生活に気をつけておけばよかった」と話を聞くことができたことを話したあと、こう語りかけました。「その時、私の中で進路の選び直しが始まりました」。教室は、水を打ったように一人ひとりの集中に満たされていきます。「自分が食べるものを自分で管理できる人、そういう人を育てるために私は家庭科の教師になろうと決めました」。

コロナ危機の中、それぞれの学校では感染対策を行いながら、子どもたちの学びを保障するという、難題に取り組んでいます。この状況の中では、教師自身が学ぶことを大切にしたいけれども、研修を削らざるを得ない学校が増加しています。しかし、この学校では、自分たちの学びを大切にしようと授業研究に取り組まれているのです。授業研究の中でも大切にされているのが、指導案を事前に検討することです。

最初にこの先生の指導案を見せていただいた時、導入は食物に関するクイズをいくつか出して、生徒がそれに応えていくというものでした。検討を進めるうちに、この学習が先生の人生の選択に関わっていることを伺うことができました。クイズやゲームではなく、是非先生の人生を生徒に語って欲しい、そう提案したのです。どういうことを、どんな順番で語るか、試行錯誤されたと思いますが、結果は最初に書いたような見事な導入となって、子どもたちを惹きつけていきました。

今多くの学校では、くっつけていた机と机の距離を離し、隣同士の対話を減らし、グループ活動の回数を制限しています。一番会話が弾む給食の時間でさえ、「黙食」という言葉が流布するようになりました。マスクをした上で、人と人が対話する時間をできるだけ短くするのは、感染対策の上では致し方のないことです。そうであるならば、人と人が対話する時には、自分が大切にしていることを出し合いたい、命に届く授業をしたい、そう思えてなりません。それが、人権教育が大切にしてきた「生き方を語る」という営みなのです。